

平成 30 年度第 1 回まちづくりボランティアセンター運営委員会

【A グループ討議要旨】

テーマ：まちづくりボランティアセンターのめざすもの

【事務局】（趣旨の説明等）

【香山委員】多様な分野の人がまちづくりボランティアセンター（以下：VC）に関われるようなものをめざしたいということだが、意見はあるか。

【小池委員】今年度の第 49 回関東甲信越静社会教育研究大会長野大会。社会教育委員は、5 分の 1 くらいは元教員等の教育関係者。社協とつながりが無い。なぜ福祉教育を社会教育でやらなきゃいけないんだ、と思っている。餅は餅屋でいいと思っている。もっといろんな人が一緒にやっていかなければならない。目指しているところはほぼ一緒。一緒にやっていけば視点が広がる。全国ボランティアフォーラム軽井沢にも参加したが、同じようなにおいの人（＝同じような活動をしている人）が多かった。ひろがらない。同じにおいの人だけでは当たり前の話しかできない。企業など、どう違うにおいの人と関わるかを考えていかなければならない。

【山岸委員】社協は PR が下手。福祉教育を社協職員が知らない。社協が連携連携といっても下手。介護保険制度が入って社協はそっちに重点を置いている。同じ仲間だけではなく、学校や公民館などアウェーな世界に入っていかなければならない。社会教育関係の企画で、県社協共催なのにだれも来ないものがあつた。

【香山委員】介護保険制度の中で、現場のなかでは地域福祉について『助けあい』に比重が置かれている。

【新井委員】地域包括ケアシステム構築しようとしている、地区の人が担い手。そこで社協は何やるの？ 長野市でいうと地縁組織の人に押し付けられている。そこに社協のコーディネーターはどうかかわっていくか。縦割りをどうするか。まちづくりは多様。商店街の問題など様々。どういう切り口でいくか。色々な人が集まる場をどう作るかが社協の役割かもしれない。

【香山委員】県社協から見えてる市町村社協とは？ 影響が大きいのは、市町村合併。かなり広域型の合併。そのため、もともとの町村にあつた社会福祉協議会が埋没している。そこがなかなかみえていない。単に市町村社協をみるだけではなく、細かいところまでみるべき。実態を把握しないと、抜け落ちてしまうところがあるのではないかと感じている。住民自治協議会へ投げられて住民支え合いをやれと言われてる。社会福祉協議会の VC 自体がどう関わっていくか迷っている現状。まちづくりという観点では、人口減少で小地域で高齢化が進んでいるなかで、地域をどうするか。支え合いだけでなく、地域振興、観光振興、生活基盤をどう支えるか、とい

うようなあらゆる問題がまちづくりに凝縮されている。その中の福祉というふうにとらえる。福祉だけをとらえる時代ではないと考える。まちづくりからアプローチして、最終的には福祉につながる。

【新井委員】地域で存続していけるかはお互いの責任。長野市のある地域に住んでいるが、65歳以上が70パーセント、10年後は成り立っているか自信がない。そういう地域はいっぱいある。小さな拠点といわれているがどう地域が変わっていくかみたいなことはいろんな意味で影響してくるのでは。

【香山委員】中山間地域に小さな地域拠点づくりを行って、そこで支え合いやまちづくりを行うということが言われている。それは中間山間地だけではなく、街場も。松代では、元コンビニの空き店舗をまちあるきセンターにした。そこには観光というまちあるきだけでなくジャンルだけではなく、あらゆる人が参加して顔をだしてくれるが、意外とつなぎ役として大事。こども食堂なども、まちあるきセンターに入出入りする人が、そういう地域のニーズに気づいて始めたりしている。小地域型の小さな拠点というのが大事かなと改めて感じている。VCも本来そういう機能が備わっている。

【山岸委員】地区社協が、そういう仕掛けになっているとうれしいと思うが実際は難しい。区との兼合いが特に難しい。安曇野市は区のなかに部制度になっている。その福祉部に地区社協が突っ込まれた。区長と地区社協会長が一緒のところはいいが、別々のところは全く進められないという微妙なところ。協議体と社協の兼ね合いが難しい。福祉教育というものをどうとらえるか。多様な人が関わって地域包括ケアシステムを作っていく。そういく土壌を作っていくことを福祉教育ととらえていくべき。学校というところにとらわれないほうがいい。住民の福祉力を向上させていく、主体性を育むということをもっと社協はしっかりと考えて進めていかなければならない。社協は中間支援組織、地域と地域をつなぐ役割があるが、それができていない。社協の職員が、小地域に出て一緒にやることをわかっていない。

【小池委員】社協職員の数が少なくなってきた。たとえば、大きな市である程度の広さの地域を受け持つと、各地域に月1回でかけるだけでも大変。しかも夜に住民が集まっているところに説明しにでかける、とてもじゃないけど、困りごとや課題を聞いたりコーディネートすることはできない状況。地域に拠点を作ろうとしても、社協がそこまでやるんですか、という意見が、激務に耐えかねて出てきてしまう。20年くらい前は区の中に、地域の困りごとを解決するボランティア団体があり、介護保険の前から、おばあちゃんとかの困りごとを聞いていた。色々な制度ができてきたら、足が遠のいてきて、そのうち、その方たちが高齢化のため辞めていく状況。20年前以前はなぜそういうことができたかという、社協のみなさんが地域にでて住民の前で福祉教育や支え合いを、これからこれが大事になっていきますよ、といって、じゃあ私たちが何かしよう、となっていたのに、それを続けてこなかった

たのかもしれないと思う。

【山岸委員】その原因は合併と社協の異動。大きくなって住民の顔がわからなくなった。顔つなぎ役がわからなくなった。私たちは地域全員の顔を知ることは不可能。ただし、核となる人を知っていればいい。核となる人が地域の状況を私たちにつなげてくればいい。制度が地域の助け合いを壊してしまった面があり、デイサービスに行くようになったから、見守ってたけど見守らなくていいか、というような。ケアマネの中には地域資源をつなぐという発想がない人がいる。制度だけでがちがちになってしまっている。でも、ようやく見直されてきている。地域共生社会の実現はチャンス。

【新井委員】生活支援コーディネーターが地域に配置されたことで、そういった人たちとつながり、新たな人とつながり、課題を見つける。県社協もそこに関わっていかなければならない。

【山岸委員】コーディネーターは悩んでいる。協議体の運営で頭がいっぱいになっちゃっている。協議体のそもそものあり方が間違っている。わかっているけど行政のやり方に文句を言えない。協議体は本来、生活支援コーディネーターのバックアップ組織のはず。でも今は、協議体をそつなく運営するほうになってしまっている。

【香山委員】そういった現場の動きを、県社協は一つの地域に入り込んで実態把握が必要かもしれない。

【山岸委員】迷っている。前例がない。全く新しい制度だから。あっちともつながりなさい。こっちともつながりなさい。コーディネーターは何していいかわからない。こればっかりという事例はまだ少ないと思う。小さいところはうまくいっている気がする。コーディネーターがたくさんある。ボランティアコーディネーター、地域福祉コーディネーター、生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカーなど、任命された人が自分たちは何がどう違うのかがわからない。

【小池委員】自治区からするとこれ以上役割分担を増やすなという気持ちがある。区のトップの人達が割り当てて会議に出ているが、これ以上あて職をもってくるなという。本来であれば普通の住民に地域共生社会や福祉教育を知って欲しい。話し合う会議が上の人たちばかり参加しているからちっともよくなる。本当は上の人だけではなく、地域住民を対象としたもの。一番底辺にいる人たちが、私たちの住むまちをこんなまちにしていきたいなという思いをまず共有できていること。県社協はその仕組み作りを、理路整然としたものではなく、下から救い上げていくというような手法や講座を増やしていかなければいけないんじゃないか。社協の発信が末端の人たちまで届いていない状況があるのではないか。

【香山委員】今の話から、底辺から積み上げていく必要があるような、積み上げていくような視点がないと実践がともなわない。

【事務局（高橋）】確かに一つの地区に入り込むことはしていない。協議体や地区のことを言われてもわからない。県社協として相談があっても解決ができない。仕組み作りや解決法を提案できるようになりたい。情報の発信も丁寧にやりたい。

【香山委員】あえて、まちづくりという名称にした意図はありますか

【事務局（山本）】『ボランティア』というくくりではない、活動が増えてきているということ、そして地域課題の解決のためには、まちづくりから関わっていかねばいけないという問題意識から発生している。

【山岸委員】社協同士お互いにやっているということを知らないボランティアとかまいさぼは、本当は一緒にやっていくんだよ。なんのために地域資源をつくっているのか、そこを県社協が見つないでほしい。上の人の意識を崩す。研修会とかで。大きな研修会ではなくていい。底上げをしてほしい。

【事務局（小穴）】市町村社協の人には十分伝わっていないかもしれないが、今年度県社協では企画グループができたり、若い職員が増えたりしてして相当フラットになってきているので、市町村社協でも取り組み始めていると思う

【新井委員】県社協の取り組みで、災害支援のために生協や企業等とつながっているという説明があったが、実際の現場では、県的なネットワークでは動けないのではないか。

【事務局（徳永）】県的なネットワークはあくまでも県的。災害が起きたとき、何かやるのは市町村レベル。住民レベル。市町村でも県的なネットワークを作れるように支援していきたい。

【新井委員】県的なネットワークを広げて、実際に動けるネットワークづくりを支援して欲しい。

【小池委員】諏訪で防災講座を開いた。こどもたちから大人まで集めて楽しく学ぶ講座。参加者には、防災学習を拠点としながら地域の拠点・きづなづくりにつながって欲しいと思っている。そしてそういうような講座や効果を、いい事例を集めて県社協が広めてほしい。防災講座も市と連携してやっているものはいっぱいあるので、それだけではなくて、住民と連携するような講座をやってほしい。被災したときに住民自身が生き延びるか考えられるような。ネットワークに住民も参加できるような。住民から講座を開いて欲しいと言われるような講座をやって欲しい。

【山岸委員】防災講座はずっとやっている。市でもどこでもやっている。社協の中で事例として落とすのではなく、企業や市町村にも、社協と一緒にやるとこのようなことがいいですよということを落としていってほしい。

【新井委員】備蓄ツキングなど防災テーマにして楽しい講座を。色んな事例を持ち寄れる場があればおもしろい。見本市。

【小池委員】関東甲信越静社会教育研究大会の活動見本市は好評。目からうろこ、こんな活動あったのか、という声が聞かれた。なぜか住民は『こんなことはやってはいけない』と考えちゃう人がいる。

【新井委員】諏訪は防災の意識が高い。

【山岸委員】他の地域の住民は自分のところは災害が起こらないと考えている。マップの研修をやってもほとんどが起こらないと考えている。

【小池委員】10年くらい前、糸井構造線の地震に関して、静岡山梨諏訪等が集まる検討会議があったがその後開かれていない。しかし、せっかく会議をはじめてもやらなくなってしまおう。

【新井委員】続けていくことは大事。

【山岸委員】色々な制度があるなかで、住民が危機感を持たないといけない時期。・・・

【新井委員】高齢化が進んでいるところでも、10年後は大変だといいいながら『今は大丈夫』と思っている。若手の人数が少なく将来の話ができない。

【事務局（小穴）】香山委員さんが携わっている松代の取り組みを継続できているコッはありますか。

【香山委員】地域ニーズに対してどう取り組むのかということを更新し続けている。中心には拠点がある。そこに人が集まってニーズに取り組んでまちづくりに取り組む。多様な人が入り込んでいる。最近では中学校の生徒が豊栄地域のまちおこしに関わっている。地区社協は介護の課題に比重をおいて関われなくなっている。多様な人たちと討議しながら、具体的な活動につなげていくか。

【事務局（小穴）】トレンドで『課題から入らない』ということがある。何かできることを活動することから始める。

【新井委員】飯田市の公民館の取り組みはすばらしい。地域課題に公民館職員が関わって取り組んでいく仕組み。飯田市千代の取り組み事例など。

【小池委員】飯田市は公民館職員の意識も変わっている。若手職員が地域へ出向いて、地域とはなにかということを理解させている。地域おこしにも関わっている。上田市は公民館のなかに認知症サポートセンターを作っている。認知症になってもこの地域では生きていけるよということを知らせている。

【山岸委員】全部の公民館がそうになっていると思っていると期待外れになっちゃう。でもまだ公民館はカルチャーという志向のところもある。

【香山委員】ボランティア数が減っていることについては？

【山岸委員】社協の統計上のボランティア数が減っているが、実際の活動者が減っているわけではない。ボランティアという言葉を使わないだけ。有償ボランティアを認めていないわけではない。だが、有償ボランティアを地域は求めている。ボランティアの考え方が変わってきている。制度の中にボランティアが組み込まれると、それは本来の意味でボランティアではない。ボランティアに対する考え方が変わってきているのかも。

【香山委員】社会活動や市民活動、ボランティア活動は広がっている。それを社会福祉協議会が把握できていないとかアプローチできていないのではないか。すそ野は広がっているのだろうが、あえてボランティアという言葉を言わない。

【小池委員】来年民生委員の改選期。推薦人をやっている。前々回くらいから断られることが多くなった。だれかのためにという地域の福祉力が落ちてきていることを感じている。昔世話になったから味噌汁を毎日近所のじーちゃんばーちゃんに作るという知り合いがいるが、それをボランティアだとは思っていない。世の中のためにできることをできる範囲でやる。そういうのが減ってきたのは、…今は疲れちゃったのかな。あれをやれこれをやれといわれすぎたのかなと思うこともある。住民の福祉力について学びなおしの時期が来ているのかなと思う。

まちづくりVC運営委員会 GW(A)

協働の場

まちづくりセンターが目指すもの

多様な人が関わる場

社協

介護保険に比重を置いて

社協と接点かできた

社会教育 ↔ 福祉教育
中から 一語一語 ほぼ一語一語な目標

全ボラ 同じような人が集まっている

↓ 社協で同じ仲間が集っている
○広がり

○ボランティア数へっている。
○できる範囲でできることを福祉力が増えている。

県社協

社協はどう関わり
いいか

色々な人が集まる場をどう作るか

色々な人が集まる
土壌を作る、主体性を育くむ

人と人とをつなぐ

社協の役割

市町村社協だけでなく
地区社協にも目を向ける。

県社協も一つの現場に入って
実態を把握しよういかか?

小規模拠点づくり

・あつちる人が参加
のつなぎ役

社協

区とのかかわりが難しい

・人が少ない → 激ムのため拠点を
あきらめられている。

協議体

・えらい人しか集まらない
・どうやって運営していくかわからない

講座

・一番下?の人が参加できるように
・防災のみほん市

・地域ニードは常に変わる
・人が入ちかわる。
・人が人を呼ぶ
・どう行動しようか ← 地域課題

若手は
地域と接する
知る

地域のなかの
核となる人を知る

県社協は
仕組みづくり

昔は
地域の前に出ていた

自分たちの
巧みは、自分
たちでなんとか
する

県社協に期待すること

- 職員同士同じ目標に向かっていることを教える場を作してほしい。
- 市町村レベルのネットワークを作る支援をして欲しい。
- いい事例を広げて欲しい